

(別紙1)

尼崎市支え合いを育む人づくり支援事業 教育・研究活動事業実績報告書

教育・研究活動名	防災・人災を防ぐエンパワメントプロジェクト			
申請大学・高校等名	大学及び 高校等名	武庫川女子大学		
	活動 グループ名	福祉ボランティアサークル MUKOnnet	参加学生 等人数	30 人
指導責任者名 及び連絡先	学部・学科等 名称	武庫川女子大学 心理・社会福祉学部社会福祉学科		
	責任者氏名	○大岡由佳 松端克文 浅井鈴子	連絡先 電話番号	
	E-mail			
協働する市民活動団 体及び代表者名	団体名	尼崎市保護司会／一般社団法人 TICC		
	代表者氏名		連絡先 電話番号	
	E-mail			
教育・研究活動 目標	近年、各地で人災(犯罪被害)をはじめ、自然災害が起こり、その対処に追われている。予めの人災や災害への備えは市民レベルでは行われていない傾向にある。市民の人災の防止や、防災の意識を高めてもらうことが求められている。今まで、人災(犯罪被害)や被災の支援を行ってきた地域機関とともに、市民への防災啓発活動を行い、人災や災害を自分事としてとらえることができる市民を増やす。			
活動内容及び 実績、評価	(活動内容及び実績) 人が犯罪被害に巻き込まれると、その家族は非常事態の中、被害者はメディアスクラムを回避するためホテル住まいになったり、加害者はいたづら電話や誹謗中傷されることから家を出ざるを得ないこともあり、いずれの場合もその家族の中にいる子どもたちにとっては、非常事態である。犯罪被害家族の子どもに至っては、その子どもが親が事件後の不調により、生きづらさを覚えてしまうことがある。これらは、震災等の災害と同じく、個人に襲い掛かる非常事態であり、安心できる居場所を喪失する意味では同義である。 (企画1)これらの課題に対し、尼崎保護司会と連携して企画を温め実施していくことを活動内容とした。また、同時に、尼崎市の非行少年等のために日々活躍する更生保護分野の保護司のことは知ってもらい、地域全体で人災を軽減していく講演・シンポジウムを企画し実施した。保護司の高齢化が叫ばれる今、30代40代の子育て世代層にも働きかけて実施した。 (企画2)非常事態が起こったときの“もしもの時のお守りお菓子ポシェット”(原型:防災お菓子ポシェット)の作成企画を尼崎市の子どもたちに提供し、子どもには、人災や災害といった非常事態に有用なポシェットづくりを通して、非常事態を想定してどう準備しておくかについて考える機会を提供した。 (企画3)非常事態は個人に襲い掛かるが、それを地域で助け合うことも重要である。そこで阪神淡路大震災後30年目を迎えることもあり、地域防災の強化を目的に防災士の方も参加していただき、非常事態に備えて日ごろからできることについて防災士の方から講話していただいた。 具体的には、(企画1)講演会、シンポジウムでは、そのような犯罪被害の芽を摘み取るべく、非行に焦点を当てた市民向け講演会を行った。更生保護に関わる実務家とともに学生も参加して、地域でどのように更生保護を考えるべきかについて、講演後のシンポジウムにてディスカッションを行った。この企画と通じて、今まで光の当たりづらかった尼崎市の保護司の存在感を高め、保護司を担う人材の獲得を目指した。 また、(企画2)“もしもの時のお守りお菓子ポシェット”作りでは、昨年度の一般社団法人おいしい防災塾(https://oishi-bosai.com)から本学学生が学生キャンディーアンバサ			

ダーとして認定を受けているため、それらの学生を中心にポシェットづくりをオリジナルで展開した。学生らは、年度年度で協力者に入れ替えがあるため、新たにお菓子ポシェットに参画できる学生への作り方研修を学生らが実施し、それらの新規メンバーも参画の上、非常事態における子どもの“おもり”を子ども達と作成した。

(企画3)では、参加している子どもと学生キャンディーアンバサダーが、お菓子ポシェットづくりをしている間に、防災士・社会福祉協議会・参加児の保護者が、阪神淡路大震災を振り返りながら、備えについて避難場所や備蓄品などについてディスカッションを行う。また、最後には、防災士と参加者全員でディスカッションを行った。

(企画1 写真)



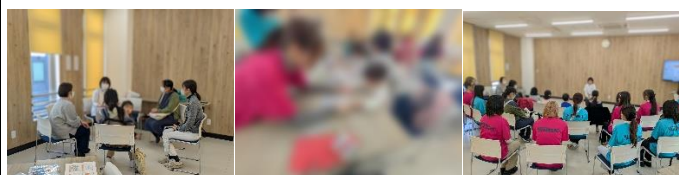
(評価)＜大学側＞学生自身が、人災について他人事・稀なことではなくいつ起こるかわからない身近に潜んでいるという理解につながった。また、保護司の方々と直接コミュニケーションを図れたことで、地域自治についての理解も深まっている。＜地域側＞保護司会としては、若い方と接する機会が多くはないため、このような機会が有難く、若い人の意見が参考になった。TICC としては、ボランティアとして多くの学生に関わってもらうことで活力を感じた。一方で、情報伝達の音頭をとるスタッフが学生のなかで位置づいていなかったために、依頼事などを全体で共有するのに手間取ったことが課題として挙げられた。

(企画2 写真)



(評価)＜大学側＞ポシェットを作る際に子どもの自主性を尊重し、大人は可能な限りサポートに回り作成することに学生も心掛けている。作成前には防災についてのクイズを実施しているため、作成時には参加者と学生が備えについて振り返りを行っている様子も見られた。＜地域側＞今回は、地域の情報誌などでも広報をしたが、昨年度この企画が良かったからまた参加したといった声も多数あった。保護司会、TICC としては、昨年度に引き続き行う企画であったため、学生の一部が大変主体的に活動されており心強く思った、という意見があった。また、参加者は子育て世代で忙しいため保護司会の広報を割愛したが、その市民層にこそ保護司会のことを知ってもらうことが今後重要だといった声もあった。

(企画3 写真)



(評価)＜大学側＞防災お菓子ポシェットづくりに参加した経験のある子どもたちは、ポシェットづくりの約束である『すぐに食べないで、災害時に食べる』『賞味期限の日を迎えてお

	菓子を食べれることは幸せなこと』を覚えていました。学生たちは、伝えていきたいこと『備え』が子どもたちに伝わっていることを実感し、活動を継続する意義を改めて考えることができました。また、保護者からは、生活を見直すきっかけとなったとの意見もあり、備えについて理解が深まったと考える。＜地域側＞社会福祉協議会との共同事業の位置づけであった。学生らに主体で企画を運用してもらえたことは意義深かった、との意見があった。
--	---

※ 報告書の内容及び掲載写真は、市報、HP等の市の発行する媒体への掲載される場合がありますので、事前に学生等の同意を得た上で、提出をお願いします。